

氏名（本籍）	張 強（中国） <small>ちょう きょう</small>
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	甲第 115 号
学位授与年月日	平成 27 年 9 月 25 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	近・現代の日本人の名前に関する言語学的研究
論文審査委員	主査 教授 夔 竹民 委員 教授 岩井 千秋 委員 教授 横山 知幸 委員 教授 柚木 靖史（広島女学院大学）

〔論文審査の結果の要旨〕

平成 27 年 7 月 15 日の国際学研究科委員会で、本審査委員会の設置が承認された。審議に際して次の具体的な手続きに依ることとした。

1. 学位論文を審査委員に送付し、各委員が査読を行い、その結果について本審査委員会で報告し、論文の内容、方向及び今後の研究課題等を巡って口述試験を行い、学位授与の可否を判定する。
2. 研究者としての資質、能力を把握するための一環として、公開の発表会を設け、そこでの口頭発表や質疑応答の内容について審査委員が評価する。

7 月 24 日に実施した公開発表会では、40 分間の口頭発表と 50 分間の質疑応答を行い、更にそれに続いて実施した審査委員と学位申請者のみによる最終の口述試験では 90 分間の質疑応答を行った。質疑応答では主として学外からの柚木審査委員に本研究に対するコメントや質問を優先してお願いした。その席において、学位申請者は意欲的に学位論文の全容を紹介しつつ、要領よく要点を絞りながら説明を行った。質疑応答では研究の目的を達成するために行った調査の方法、論考の手順並びに結論に至るまでの質疑がなされた。いずれの質問に対しても学位申請者は的確に答えた。その結果、本研究は、独自で構築したデータベースを使って日本人名について言語学的な視点から独創的に分析、研究を試みたものとして博士論文に求められる水準を十分に満たしていること、また、表記とモーラ、男女別及び時代別等といった見地に立って、興味深い研究テーマが扱われており、将来性のある労作であるといった評価が審査委員全員から寄せられた。公開発表会では、出席者からの多角度による質問に対して学位申請者は丹念に答え、質問者を納得させることができると共に今後の課題への認識を表明した。本論文は日本人名の研究について従来の研究と異なった、新たな知見と示唆を与えると同時に、日本人名を通じた日本文化の理解といった日本語教育への応用にも寄与しうることが将来的には期待される。更に、命名の科学的研究や本研究の最終目的とも言える中日人名の比較研究への応用についても有益な示唆を与えるものである。

審査委員による事前の論文査読、審査委員会での口述試験の結果に基づき、本審査委員会は、本論文が、①「調査、分析の綿密さ、研究技術の妥当性」、②「研究方法と論点との整合性、独自性」、更に③「研究テーマの適切性、将来性及び研究者としての資質」において、本学の課程博士の学位論文として適格であり、博士（学術）を授与することが可であるとの結論に達した。審査委員会としてここに報告する。

名前は人を弁別する符号としてその国の文化の継承、社会の変容、世相の流行等を活写し、投影する言葉である。そのため、名前を巡って文化、歴史、民俗及び社会等の視点から研究が多く行われている。一方、名前を一種の語彙として捉えて、言語学的な見地に立って、アプローチしようとする研究も見られている。斯様な研究を行うのには質量とも研究に耐えられ、客観的で且つ信頼性のあるデータベースが必要である。しかしながら、かかるデータベースは一般的語彙データベースと違って、その確保、構築において様々な難点の克服を要するものである。先行研究においては数多くの成果が上げられているものの、研究資料の偏り、個人情報の開示制限や調査の人数、時間、性別等への配慮の欠如という難点も少なからず見られる。本論文は日本人の名前（以下日本人名と言う）の実態を漢字表記やモーラ（音韻）という言語学的な観点から分析し、性差や時代差を通して解明するという目的を達成するべく、時間の幅や漢字表記及び読み方付きというような性格が具わっているデータベースを必要とするものである。換言すれば、斯様なデータベースを構築することは本論文にとっての研究の基盤であり、日本人名の研究において独創的な試みでもある。予備調査を通じて候補として幾つかの調査資料を選出し、見比べた結果、『読売年鑑』人名録（1968年版、1987年版、2007年版）の選定に至った。その上で、年代別、男女別、漢字とモーラ別に整理した研究用データベースを作成して、本研究に相応しい、信頼性の高い情報を引き出すことができるようになった。続いて、先行研究の方法を踏まえて本研究の目的に適応する独自の研究方法を案出した。つまり、日本人名の漢字表記とモーラの特質、更に両者の関係を取り上げて計量的に分析すると同時に全体像を把握する。こうした処理を経て、性差や時代差についても細かく分けて考究を加えている。これによって、日本人名の実態、男女差、時代差、漢字表記の特異性、モーラの特徴等が明らかになった。

以上を踏まえると、本論文は主たる独創性として次の点が挙げられる。女性の名前や漢字表記等を中心に行われてきた先行研究と異なり、女性の名前に止まらず男性の名前も研究の対象として漢字表記とモーラを併せて総合的に研究を進めている。更に、ミクロ的に「名根」「機能的名素」「モーラユニット」「名値」及び「止め字」等のような新しい考察視点を取り入れて考究されている。また、共時的な先行研究とは違い、動的に日本人名の移り変わりを捉えようとする独自性も見せている。

本論文は基軸とする四章より構成され、その前後に序章と終章とを配している。更に、巻末には今回の調査によって採録された全てのデータを資料編として添付している。各章の概要は以下の通りである。

〔論文の要旨〕

序章では、先ず本研究の目的と意義を述べ、その上で、目的を達成するために先行研究の日本人名の認定基準、範囲及び方法を援用しつつ、本研究の調査範囲、対象を選定し、調査方法を案出している。

第一章では、先ず本研究と関連性のある、民族学や歴史学の観点から日本人名について調査された従来の研究に触れている。その上で、研究方法等において本研究と類似し、特筆に値する先行研究に的を絞りながら、その研究方法、使用資料、記述及び分析の論点等について精査すると共に先行研究における問題点、改善点等が指摘されている。

第二章では、先行研究の問題点等に注意を払いつつ、研究資料の選定、特性等に関して説明した上で、データベースの構築や本研究に用いる用語についての定義や解釈、概念規定を行った。続いて男女名を巡ってこれらに使われる使用字数とモーラ数の統計調査を行った。それを踏まえながら漢字表記の字種・字数やモーラ及び仮名数・仮名字種を総合的に調査、記述することによって、男女名に関する言語学的な実態が浮き彫りにされている。

本研究に使用する人名データベースは筆者が『読売年鑑』の人名録を資料として、調査、収録して、データベース化したものである。最終的に、重複データの除外作業を行い、収録した人名データ数は、男性名 21,453 個、女性名 2,272 個である。データベースが対象とした出生年の幅については、男性は明治元年から昭和 64 年、女性は明治 9 年から平成 1 年となっている。こうして作成した資料は単に言語現象を把握するためだけではなく確かな研究の基盤として研究成果の信頼性に大いに関わる。また、今後の研究にも有益となるであろう。

第三章では、日本人名の男女差や女性名の特徴を明らかにするために、先ず女性名を取り上げて漢字表記やモーラという両面から計量的、実証的に分析を行うことによって、日本人の女性名についての様相が把握されると同時に、先行研究と違った、次のような特徴が確認された。

日本人名を構成する要素（語素）の位置別で見れば、女性名の漢字表記の字種として止め字の代表的な存在とされてきた「美」と「恵」は 1 文字目の上位に使われている一方、3 文字名の 2 文字目においても、依然として最上位の用字として用いられ、止め字枠になっており、使用範囲の広い女性名の漢字としての性格を見せている。また、漢字「子」は女性名の代表格とも言える顕在止め字としての存在が際立っているが、昭和の前期と比べて、後期の使用頻度の減少が顕著になっており、その後も減少傾向が続き、今日に至って、女性名からはその姿が殆ど消えている有様である。

性差について、表記において女性名の仮名多用に対して男性名の漢字専用とも言える差異が見られる。また、漢字表記の字数として男女とも 2 文字の占める割合が最多で 1 位となっているが、2 位には男女差が存在している。つまり、女性名は 3 文字表記が約 3 割を占めるのに対して男性名は 1 文字表記が 2 割近くなる。モーラについては、女性名が 3 モーラに偏り、占める比率が 9 割近く、その使用頻度が高いことが分かる。一方、男性名のモーラは 3 モーラの占める割合が最も多く、5 割程度であるが、4 モーラも 4 割強あり、あまり格差は見られない。つまり、女性名は 3 モーラ、男性名は 3 かまたは 4 モーラが一般的で、男女名のモーラ数として異なった使用の傾向が明らかにされた。

第四章では、先行研究において殆ど研究対象とされなかった男性名を巡って、漢字表記とモーラに焦点を当てて女性名との比較が行われた。その結果、以下のような諸点が判明

した。男性名の字種構成は女性名とは大きく異なり、仮名字種の少なさや踊り字のないことが挙げられる。当用漢字と表外字の比率の差もあまり見られない。男性名の上位字種ランキングは女性名と異なった様子を呈している。女性名では「子」を始めとする止め字の存在が際立っているが、男性名では質量とも目立った止め字が少なく、1位に上がっている漢字は止め字ではなく、順番を示す漢数字の「一」等である。なお、「郎(ろう)」「おグループ」「彦」「すけグループ」などが示すように、同じ止め字枠であっても、多様性が表れている。また、顕在止め字の外、男性名には「司(じ)」「史・志(し)」「樹(き)」「人(と)」「弥・也・哉(や)」等、多種多彩な潜在止め字も存在している。しかし、それらはいずれも止め字枠としてその上位を占有するには至っていない。これは女性名のそれと最も顕著な違いであると言える。更に、人名の漢字表記の字種を位置別に見たところ、男性名の字種は女性名と同じく、全人名を通じて、1字目は字種が最多であることが分かる。

なお、男性3文字名の1文字目の12位に止め字と思われる「お=雄」が入っているが、実際に確認したところ、全て「ゆう」の読み方となっていた。これは女性名の「恵=けい」のケースと類似している。「雄」は漢字字種としては、止め字枠に分類されることが多いものの、別の読み方も有することを意味する。人名においてこのタイプの漢字の使用傾向は、本研究の調査で明らかにされたように、その読み方は大抵位置別に分けられているため、このような日本人名の規則性が日本人名の教育に生かされていけば、日本語学習者が日本人名の習得等において間違えることが少なくなるであろう。

終章では、本論文において分析、考究を通じて明らかになったことや更に調査研究を要するところ及び今後の研究課題について論述されている。その上で、先行研究の指摘、結論と違った諸点を挙げつつ、本研究の独自のなところ等も述べている。

なお、論文の細部については、誤字、脱字や不自然な日本語表現等の問題点が残っており、論文の提出までに修正する必要があることが確認された。

(参考 本文 IV+197頁、参考文献 154点、資料篇 1045頁)